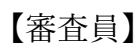


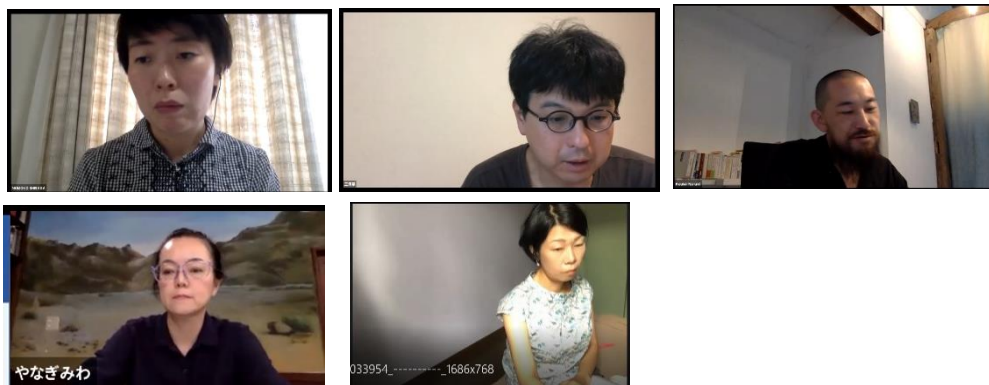
二次審査 2020 年 11 月 6 日



二次審査：愛知芸術文化センター アートスペース B にて開催

去る 2020 年 9 月 17 日、11 月 6 日に第 20 回 AAF 戯曲賞一次審査会、二次審査会が行われました。今回は国内外から 117 作品のご応募をいただき、審査員全員が全作品を読んだうえで議論が行われました。非公開の会議ではありますが、審査員の皆様に了承を得まして一部を抜粋してお伝えします（編集している部分があることをご了承ください）。

一次審査会（9月17日）



司会 皆様お集まりいただきありがとうございます。一次審査はオンラインでの開催となりました。初めてのことでございますがよろしくお願いいたします。

今年は緊急事態宣言下での募集となり、告知も十分に行き渡らないのでは、と心配する中での募集期間ではありましたが、全国から 117 作品のご応募がありました。募集期間であった 6 月～7 月は、劇場が休館し公演が中止・延期する中、少しずつオンラインでの公演も始まった時期と重まりました。まずは審査員の皆様の所感からお伺いしたいと思います。いかがでしたでしょうか。

三浦 思ったよりコンセプチュアルなものが少なかったですね。コロナが反映されている作品も予想していたより少ないなと感じました。これまでの特別賞の影響か高校生、高齢の方からの応募も多かったように感じましたね。

司会 高校の演劇部は大会がなくなってしまったので「戯曲だけでも応募しては？」と先生が応募を勧めてくださる学校もあったようです。

羊屋 年配の方の作品では気持ちよく書いているなあ、という感じの作品が多かったかも。上演を前提とせずに書いた作品だからかな？

三浦 そのかわり 20～30 代の世代が少なかった。

鳴海 公演自体が少なかったからかもしれないですね。

やなぎ 私は今までよりも読むのが少々しんどかったですね。全体的にエネルギー量が減少したかな、という印象です。コロナを扱った作品は、コロナ禍以後の SF 的なほど極端な格差社会の設定など、どうしてもまだ練れていない。あと、「昔、書いた戯曲を書き直した」という作品もこれまでより多く感じました。

白玉 確かに、「あつため感」というか、過去の自作を書き直した作品、これまでのリサーチをまとめたというような時間をかけた作品は多かった気がします。福島や東日本大震災を扱った作品も多かった。そういう中には大作もありました。

白神 去年は「ラノベ(ライトノベル)っぽい」と感じがした作品が多かった印象でしたが、

今年は「映画っぽい」と感じました。物語、大作系が多かった印象です。

羊屋 お化け、幽霊、ファントム、死者が多かったですね。そして死者がすぐ戻ってくる物語。すでに「オンラインで上演しました」という作品も。

白神 最新の話題といえば‘芸能人に対する誹謗中傷’、‘アイドルの自殺’を題材にしている作品もいくつかありました。あと、詩みたいな作品が増えた気がします。「斬新な何か」というよりは形式としては前も見たとしたものも含めてですが。前に出してくださった方が審査の傾向などを見て対策をして再度応募してくださったような感触がありました。

鳴海 コンセプチュアルなものは減った一方で、戯曲の構造を見つめ直そうという作品は多かったですね。従来の物語の形式は取っているが、書かれている方法にバラエティがありました。トータルとしては書きたいことを書きたい言葉で表しているという印象を受けました。概ね全部書いてある・読めば概ねわかるという作品は想像する余地が少ない作品とも言えますが。

三浦 形式については、毎年言っているのですが台詞に「」（かぎかっこ）を書いている人の率が高い。戯曲というよりシナリオだと思って書いてるのかな…。作家が戯曲を読んだことがないのでは。戯曲のオーソドックスというよりは、映画やテレビドラマの書き方を真似て書いているような印象を受けます。

羊屋 応募作品の中には小説もありましたね。

三浦 敢えて小説を戯曲として応募する意思を持って書いた作品であればおもしろく読めるんだけど…。

白神 詩的な作品は舞台にするときどうなるかな、と思いながら読みました。

羊屋 応募作家の中に詩人の方もいましたね。

白神 詩も戯曲スタイルの一つかな、と思ったくらい多かった。あと短い作品も。良い悪いではなくて、そういう作品が多かった、という印象の話として。

羊屋 1ページの作品もありましたね。とうとう来たか、と思った！概要が1枚、戯曲が1枚。

鳴海 あの作品は1ページである、ということに意義は感じました。1ページに詰めた言葉ということ、緊張感、切迫感があると思いました。取捨選択し、語るべき言葉を残して、それを1ページという分量を拈げた、あるまとまった時間で上演できる可能性があるという点で誠実な戯曲だと感じました。

やなぎ もちろん一編の詩が演出によって数時間になる事がありますが、戯曲であるかぎり、私は多少無駄が多くても量・勢いがあるものに惹かれますね。

鳴海 切迫した作為的状況や病性、というようなカテゴリ自体が評価しにくい理由にはならないんですが、テキストの構造を示すような設定がどの程度書き込まれているか、という課題はあります。これまでの審査でも何度も話題になった「戯曲の中での演出的指示をどう考えるか」ということですね。

三浦 もちろん「作家が演出に任せる」ことはあり得ますが、それが高度なものになってい

るかが重要です。「いかように演出してもいい」と言うにはレベルがあると思っていて、作家が沢山言葉を書いていて演出に任せる、ということはある得る。しかしヒントがない・設定という高度なところまで達していない、演出するために抽出する素材が足りないと評価のしようがない。

やなぎ ドキュメンタリーで長いものもありましたね。脳溢血のドキュメンタリー。震災の話を10年以上かけて何度も上演している作品、東京ローズ…上手くまとまっていたね。

羊屋 子どもたちの議論の話もあって、‘象が欲しい’という「子ども会議」（台東区子ども議会）の話の思い出しました。

鳴海 裁判・会議形式の文学や映画の系譜はありますが、論理的なやり取りだけだと全部言葉になってしまうので、言葉にならない人間関係や、その変化などがすべて説明されてしまうという難点があります。それを乗り越えるもうひと工夫が読みたかったですが…。

白神 そう、確かにおもしろいけど、これは演劇にする必要あるのかな？とは思った。小説として読んだ方がおもしろい。

羊屋 戯曲としては書きすぎだよね、ということね。

以上のような議論を経て、下記14作品が一次審査を通過しました。

It's not a bad thing that people around the world fall into a crevasse. （モスクワカヌ）

World Word Web （大竹竜平）

明けない夜があったとして （大内郁）

鱗を売る店 （清水友陽）

仮想クラブ （亀井健）

下山と帰国 （國見國吉）

煙に巻く （中田夢花）

氷と冬の獣たち （小野彩加・古賀友樹・櫻井麻樹・瀧腰教寛・中澤陽・深澤しほ）

犀言語 （高谷誉）

丁寧なくらし （私道かび）

NO と言って生きるなら （山縣太一）

掘って100年 （尾崎太郎）

山田くんは就活中。 （ダドイダイ）

リンチ（戯曲） （羽鳥ヨダ嘉郎）

二次審査会 （10月27日）

司会：皆様お集まりいただきありがとうございます。二次審査は皆様にお集まりいただく形で開催できてよかったです。それではさっそく審査を始めます。一次審査通過作品 14 作品について一作ずつお話を伺えればと思います。応募順に進めていきます。

『山田くんは就活中。』

羊屋 トランス男性、戸籍上女性、ゴリラという組み合わせがすごいなと思いました。とうとうこういう作品が来た、と。終わった後、嫌な感じがするのもいい。

三浦 これはおもしろかった。

鳴海 トランスジェンダーについて、「こういう手さばきがあるんだ」と面白い発見が多い作品でした。

三浦 設定の勝利もあるが、力量があって書けていると思いました。言葉のセンスもある。

羊屋 原稿は 33 枚なんだけどもっとボリュームミーに感じた！

白神 そうそう、確かにボリュームミーなんですよね。すごく長いわけではないのに。

羊屋 山田くんの登場の仕方も、「おっ」という感じ。

白神 初めはおもしろく読んで、だんだん気分が良くない、という気持ちになってくる。ぬぐえない・変わらない意識というか、「自分の方がもしかしたら間違っているのかも」と思われる感じ。問題提起がありました。

羊屋 戯曲の前に、トランス男性山田くんは当事者に演じてほしいってことが書いてあって、それは 2040 年までとするっていう期限つきなところも示唆に富んでる。シチュエーションが就職活動。そして最後、トランス男性の就職の相談をうけた先輩がずっとしゃべっているんだよね。主人公の山田くんではなく。ワンプロックずつ分けて、先輩七連発みたいな、圧がすごい。行間とか、うまい。

鳴海 書いてあることが全部わかる、すごくわかりやすい、すっきりしすぎて概ね全部説明されてしまっていて。ほんとにわかりやすくこれでいいのかなと思ってしまうほどでした。

羊屋 怖いくらい明快すぎて、毘なようにも感じるくらい

三浦 単純に読みやすかった。文体を持っている。

羊屋 すっきりした、独特の明快さがある。

三浦 完成度は高い。明るさが評価点だと思いますね。

羊屋 ラストのサイモン&ガーファンクルはどう思いました？

鳴海 ラストにイメージが定着している特定の楽曲を指定する、というのは早稲田演劇出身の私としては懐かしかったです（笑）

『リンチ（戯曲）』

鳴海 語の順を考えるシンタックス（文法・構文規則）だけではなく、この作品は使用される語自体をセマンティクス（意味論）の点で複雑化して、現代詩のような、日本語のルールとしては繋がるはずがない語を繋げて出てくる風景や感触群に対して、『リンチ（戯曲）』というタイトルをあてているのがとても挑戦的だと感じました。

羊屋 挑戦的だというのは同感です。今年の応募作品の中で一番挑戦的だったかもしれない。彼は演出家という印象が大きいので、引用が多いんだろうな、と思いながら読みました。今はまだ全部を追うのに精いっぱいですが、ちゃんと話せたらな、これを語れないといかん、と思ってます。たぶん、演出家がする脳内での言葉の入れ替えを既にやり終えているテキストですよ。

三浦 ひとつの作品として意外と平板に読みました。「わけのわからなさ」は負荷の掛け方が定まっていないのではないかと、設定、誰に向かってしゃべるのか、しゃべれないのか、そのあたりが整理しきれてないんじゃないかな、と感じました。参考文献がたくさんあって、力負けというか散らかっているな、という印象。

やなぎ 自宅介護という設定と、この言葉の内容とのつながりが分からない。この設定必然が感じられないんだけど、その辺りはどうですか？

鳴海 設定に必然があるか無いか、で言えば、ありますね。

羊屋 それで、この設定を内緒にしたままやりたいということだよ。

白神 設定も含めて、センシティブに受け止めました。緊張して扱うべき内容でしっかり議論したほうがいいと思います。これを書いた真意が気になる。タイトルと、扱っている内容と、全体的に雑に扱えない。

三浦 台詞になってない設定と、キャラクターと、どうやって言葉を繰り出すか、ということが乱暴じゃない？書きたいこととかテーマをしっかりと持っているとは思いましたが、言いたいことを言っているだけに近いのでは、とも思います。

羊屋 リサーチして作品を作るやなぎさんの好みに合ってるな、と思った。

やなぎ そうそう、私好み。ヤシの葉に書いた物語とか、ソテツとか。

羊屋 読める人にはここ大事、と読めるんだよね。ソテツと、ALS との関係性とか、

やなぎ その関係性とかが気になる。

羊屋 短いけどかなり広がっている。口語と文語が入り混じっていておもしろい。

やなぎ きちんとリサーチ力に基づく広がりがある。自信を持って引用元を上げていて言葉に力がある、キャリアを感じるなあ。ちょっと陶醉している感じはあるんだけど。

羊屋 ちょっと気持ちよさそうな感じはありますね。

やなぎ 詩としては、複雑な景色が広がっている。選挙の事とか、消費税とか、そういう問題化されている構造にふっと重なる、矛盾。シンクロニシティというか、文学としては正當なやり方という気がする。舞台上で演じられたらどうなるか、ということが気になるけど。

鳴海 多数が受け入れやすい言葉としての物語から別の次元にありますよね。詩的な側面については好みもあるかもしれません。記されている激しさは私も心地よいのですが、それらどう評価するかは難しいと思いました。コンセプトも興味深い。それがテキストに反映された結果、その反映させ方の評価には意見が分かれると感じます。

三浦 この作品は、力作だと思います。ただ、「物語」という言葉が出ましたが、どんな状況を描きたいのか見えないので何とも言えない、状況をもう少し書いてほしいなと思います。力作であることは確か。

白神 すごく考えられている戯曲だなと思うんですけど…最初はおもしろいかなと思ったんですけど、上演した時におもしろいかどうか、を色々考えちゃって。

やなぎ （主役である）お母さんはずっと寝ているから、シーンを作るのは難しいかもね。身体的な痛みを感じるときに別のことを考えている、というのをどうやって見せるのか、当事者からの視点か介護者からの目で見せるのか、と考えるとね。書かれたものだからこそ、想像力が大きく働くのかもしれませんが。舞台上で3次元に立ち上げたら、痩せてしまうかも。

鳴海 隙間なく自信や論理に満ちていて、感覚的なものと論理的なもののバランスが整っている。それがゆえに、「分からない」を読み手が共有不可能になる現象も起こりえる。

やなぎ 文学とか絵画とかでは描けても映画、演劇には向かないかもしれない？

羊屋 上演する方法を考えることは戯曲の評価とは違う。これは手ごわい、この作品と一緒に引き出しに入る作品はないです。

鳴海 どんな作品も多かれ少なかれそうですが、何をもって評価するか、何をもって語ることが、好みや関心から完全には離れられない。この作品はその点に収斂しそうな気がします。上演する人、見る人とのコミュニケーションという点で言えば、テキストに書き込まれる補助線、状況に対する言葉の質量の縮減が障害になるかもしれません。

羊屋 今この人がこういうを書いたということは重要な気はする…。

『World Word Web』

やなぎ いかようにでも演出できる自由度は高い作品ですね。個人的には短い言葉が続くのが好みではないんだけど…。これって断片的な短いセリフを、次々俳優が言っていくという事ですよね？

羊屋 スラッシュで演者が交代する、と書かれていますね。

やなぎ 力作ではあるが設定が雰囲気づくりのように感じられて弱い気がします。

白神 私は喧噪っぽいと思った。短い言葉を重ねることで情景的になったらおもしろい。Twitter 的というか SNS 的というか、現代の街っぽい感じなのかなと。

やなぎ 確かに、言葉にパフォーマンスが付けばおもしろいんだろうけど、台詞だけだとかなり厳しいと思う。

鳴海 語の文法・並び方を工夫して、テキストを超えて何かを提出しようとする試み、整った文章とは異なった文章で表現しようとしたものと捉えました。シンタックスの工夫で見

せたい世界がある、という姿勢は評価したいです。

三浦 作家が「今の気分を保存」と書いている通り、書いているものは「雰囲気」だということは明確に受け取れます。そういう点では『明けない夜があったとして』とも比較できる。これに未来があるのかは分からないが、単純に読みやすいという良さはある。日常の会話がこういう書き言葉を持ち始めたということがおもしろいなと思いましたね。

羊屋 「パフォーマンスだったらどうか」という点でいうと、ざっくり言わせてもらえば、時々自動、維新派、ヌトミックとかのような既にあるともいえる言葉の形式の亜のようにも思える。「もう雰囲気は分かった」と思わせないような形式の新世代とか更新をを感じたい。Linuxで「新しい装置」という設定はまだ説得力が弱かったかな〜と。

やなぎ そうそう、設定とあまりにも乖離している。やるならもっと徹底的に書いてほしい。

『丁寧なくらし』

白神 取るに足らない感じなんだけど、細かく書いてあることと、純粹に食べることとか、ミクロなことを書いていて好きだな、こういうの見たことないなと思って。

羊屋 家の構造が最初書いてあって、家の構造と身体が入れ子になっている。ヨガニードラの瞑想とか、VRの上演形態とかもイメージできておもしろかった。これを読めば瞑想に入れるというような感じで観客に対して面白いアプローチだなと。スーヴで日常に戻るといふ点、外に出るちょっと前で終わるといふのもいい。繊細な、感覚を追っていくような感じが身体の中だけのミクロなイマーシブシアター・没入体験型演劇になっている。コロナの自粛期間でじっと家にいて身体に対して顕微鏡みたいな感覚になったのかな、という当事者感がありました。

白神 共感しやすい。とはいえ、そこまで「丁寧に暮らしてないな」という反省もあるんだけど（笑）。いろんな上演の仕方があるだろうなとも思って。暗闇で声だけ聞こえてもいいかも。

羊屋 そうそう、暗い中で裸足で芝生の上を歩くみたいなイマーシブシアターを体験したことを思い出しました。「社会問題」と書いていて、体の中に入っていくミクロな身体との対話というおもしろさ。

白神 思い出が錯綜する感じとかね。

鳴海 主体が手とか口とか足とかと移ると書かれていますが、結局は目で見ているといふか、頭で考えて書かれていて、主体が移るならもっと書き方の工夫がほしいとは感じました。指なら指、もっと細かい（手を動かす）関節が動いてこうなるといふような、そういう主体ならではの細かさも期待してしまいました。

羊屋 そういう、擬人化的な書き方ではないよね。

三浦 「自我」というテーマは典型的ではあるんだけど、入射角が斬新だと思いました。台詞でもト書きでもないもので読ませるのは良いところだと思います。ただ、ドラマがない、「自分でヨガはできるよ」と思ってしまう。そこを補うとしたら、例えば沖縄の基地のど真

途中で一人でやるみたいなシチュエーションがあればおもしろいんだけど…。

やなぎ 似たような取り組みで、京都で見た上演を思い出しました。それはダンサーが何人かいて、それぞれが自分の身体を詳しく語る作品で、おもしろい試みではあるんだけど、ワークショップに参加したような印象でドラマがない、と思ってしまった。実際上演したら似た感じになるんじゃないかな…と。

羊屋 確かに、ここにもうひとつ構造があったらな、とは思いました。

やなぎ 「他者の身体を想像する」というこういう試みは常に必要なことだとは思う。

『下山と帰国』

鳴海 仰々しくない、押しつけがましくないという意味で品があって印象が良かった。説教くさくもなく、言葉と言葉の関係にセンスがあると感じます。

やなぎ 品がある、というのは分かる。丁寧に織られた織物のような印象です。

羊屋 「おかえりなさい」で終わる、嘘の旅。

三浦 物語としてはそれなりに書けてる感じはあるけど、最後が残念かな…。

羊屋 存在しない人達の話ということだけど、帰ってきちゃうと存在しちゃう。

白神 演劇の仕掛けとしてうんこ漏らしているのが良かった…ずっと漏れてるのが、五反田団みたいでおもしろいなと思いました。

三浦 典型的なドラマで、身近な題材で書いているという意味では『丁寧なくらし』とも似ているのかな？ドラマツルギーがあると強くは言い切れない部分がある。おもしろいところもいくつかあるんですけどね。

『煙に巻く』

鳴海 社会的には重要なモチーフを取り上げているけど、使っているのは平易な言葉だけで書き切っている。台詞の運び方はとても上手。出演者としての煙が多少のグレーな存在で、描き方としておもしろい余地があると思いました。

やなぎ 高校の演劇部でも頑張ってきた若い世代ということで推しました。ただ、女性の書き方がまだ幼稚だなという気もします。子供が大人を憧れで描いたという感じ。妊娠とか子供の事とかに言及して努力は感じますし、特に最後のシーンで女性二人が躍るのは、とても良いシーンだと思います。

鳴海 作家の等身に近いとは思いますが、ステレオタイプな面もありますね。

白神 上手だなとは思った。うまくは書いているんだけど…

三浦 この分量を書けるのは大したものだと思います。ただ、タバコの設定がおもしろくないんだよね。

鳴海 タバコの扱いが雑なのが惜しいんです…ラストシーンに持っていくための設定になってしまっていて。

羊屋 女の人たちの成長物語的なのかなと思って読んでいたんだけど、どこにも行ってない、たどり着いてない。BGM のクラシックが常に聞こえる、そして最後レクイエムになる。この流れは、とても意味ありげ。意図はどのようなのかな？引っかかる。

『NO と言って生きるなら』

羊屋 これまでの応募された作品に比べて重みが出てきた！と思いました。モノローグの中の最後にリフレインしてという変化を感じる。俳優原理主義の俳優が戯曲を書いて応募してくれてる、ということがおもしろいと思うと思っていましたが、今回の作品はこれまでより長くなっていて、俳優が舞台上にずっといて、モノローグがずっとあって、という構造でポリローグ的というか…。つまり、「モノローグ」「ダイアローグ」そのあとは沢山、という区別しかない世界でモノローグが重なりリフレインしてく「ポリローグ」といえるんじゃないかと思って。

鳴海 概要には「発話している以外の俳優が目立つように」と書かれていて、それがどう表現されているのか楽しみでしたが、テキスト上には発話されていない俳優への指示は書いてありませんでした。テキスト内に書かれていないことを判断することできない。発話されるべきテキストについては、言葉におもしろい重力が発生しているという印象を受けました。発話していない俳優に対しての言葉が書いてあれば…と思いました。

やなぎ どういう風に読むつもりなんだろう？セリフだけで持ちこたえられるのかな。ヒップホップとかの方が勢いがあるんじゃないかな。『リンチ（戯曲）』のほうが鬼気迫るものがあると思う。

羊屋 作者の山縣さんが「他の人が演出したらどうなるか」と考えているかどうかはわからないですね。リフレインが生まれて、発話をしている人・していない人がいて、それぞれ応答しているのかいないのか、わざとしているのか、していないのか…そういうことを話し合った結果が反映された集団創作ではあるんだろうなとは思う。

鳴海 発話していない舞台上の俳優のあり様、というのはこの 20 年でいろんな方法が試されてきたテーマですね。ただ、テキストに書かれていないと判断できない。概要で書いてあることをもう少し本文の中で示してほしいとは感じました。

白神 概要も台詞もキャッチフレーズ的にはおもしろい言葉が多いんだけど、いざ誰か、作者以外が上演するってなった時にどうするのか、ですね。身体について扱っているものと比較してしまいます。しゃべってない人が目立つということであれば、その部分のディレクションがもっとあっていいはず。

やなぎ そこは書かれてないんですね、概要には書いてあるんだけど…。

鳴海 テキストはコミュニケーションの一種でもあると思うから読者に伝えてほしい。書いてあることからしか出発できないので。

白神 音楽としてとらえるとおもしろいとは思う。

三浦 短歌みたいな、一行一行におもしろさがあって、そこは良いなと思うんだけどね。

『氷と冬の獣たち』

鳴海 集団創作でつくった作品という点で『NO と言って生きるなら』と似ている側面もありますが、こちらは論理的なゲームの末に風景としての論理、『NO と言って生きるなら』は音楽的。音楽と論理に優劣は付けられないので、好みになるかもしれませんが。こちらは $A=B$ である、という命題につづいて、だから A は C ではない、 D ではない、 E ではない、というように羅列していった、だから最終的に $A=B$ しかない、と。テキストとして面白い展開ですが、そのゲームのバラエティが少ないのが物足りない印象はありました。たとえば別役さん（別役実）やベケットでは、もっと多様な論理的ゲームが展開されますよね。

白神 聞いて状況を考える、というような感じかな。

羊屋 「氷と冬の獣」というのは？

鳴海 「冷たい」という感触であり、それとはノットイコールな、外れていくものを捕まえない、という態度はとても面白いと思います。

『掘って 100 年』

三浦 設定がおもしろかった。

羊屋 起承転結の「転」が「結婚を許す・許さない」にずれていくのがびっくり。そしてまた掘り続けるという押し通し方！

やなぎ 意外性があって、よう書きはった！とは思いました。

『It's not a bad thing that people around the world fall into a crevasse.』

白神 いいけど、時事的な言葉を入れすぎという印象はありつつ、気になりました。

三浦 短編重ね合わせて相当なページ数となっていて作家として体力があるところを評価したいですね。モノログや短い文章、小説っぽいものは身近な題材で書かれた作品が多いんだけどこれは視野が広い感じがありました。

鳴海 この作品が 5 年後、10 年後どう読まれるかということも思い描きつつ、プライベートなものをパッチワークのように羅列する中に出てくる独特の空気感がある。この時期にしか出てこなかったものでもあるかなと。

羊屋 このタイトル、「世界の切れ目に飛び込むのもわるくないよね」ってわたしは訳してみました。チームで作っているテキストで、言葉のキュレーションは作者がしている作り方かなと思ったり、タイトルに即したものを厳選して選んでいるよな、という気がした。きつともっとたくさんエピソードがある中で、選ぶのは大変な作業だったんじゃないかな。順番は良く分からないなと思ったけど。71 章あって、言葉・話題を一つの方向性でキュレーションしている、いい作業だと思う。

やなぎ 映像的なイメージを感じました。確かに体力はあるよね。

『明けない夜があったとして』

やなぎ 学生が書いていて、上演もしている作品。好感度がありました。

白神 好感度は同感です。読んだら意外と好きだった！という感じ

やなぎ 目新しいくはないんだけど、まっすぐ社会と向き合っている感じがした。そこを見た。ラストが『見よ、飛行機の高く飛べるを』（永井愛）的な、まっすぐな感じがして、ファイティングポーズをとっている、というのは分かる。

鳴海 端正に書いているなという部分と、社会性を組み入れようとした点を評価したいと思いました。ただ、人物の出ハケが恣意的で、プロットのために人を動かしている点、会話ではなく半モノログで言いたいことを語ってしまっていて、態度は誠実だけど技量が追いついていないという印象を受けました。

羊屋 上の段と下の段は一緒にしゃべる同時多発会話って、これは「生活していると（会話が重なることも）あるよね」から逸脱はある？敢えて会話を重ねたい、ということ？

鳴海 既存の構造としてやりたかった以外に、新しい効果はない気がします。

やなぎ あ、そこはちょっと中途半端、とは思った。本当は相当厳密にやらないと、聞き取れないし、作家にも俳優にも技量がいる。

羊屋 『冒険王』（平田オリザ）とかは、きちんと重なっている部分に意味があって。それが更にメタになっても良いくらいの世代になってきていると思うんだけどな。

鳴海 集団においては、2つ以上の話題が同時に進行するのはナチュラルだからこう書いている感じがある。そのナチュラルさに素直なのは別に悪いとは思いません。ただ、厳密さは強くはないですね。平田オリザさんの作品の場合だと、見ずに聞いているのでタイムライン間の厳密さが暗示されていますが、この作品はト書きで解説している点が多い。

羊屋 「目線を使って」とか注釈をいっぱいつけて、より分かりやすく・視覚的に、と後退しちゃっているのかも。テーマとしては憲法改正を扱っているんだよね。

鳴海 モノログっぽいシーンで種明かししちゃっているのも、それまでは何だったのか、とは思う。憲法改正についてはスタンスが不明瞭かなと。「わからない」とか「計りかねる」というスタンスかどうかすらもつかみにくい。

羊屋 引用しているところは良いんだけどね。

やなぎ そうそう、そこだけピントが合うんだよね。いい言葉だと思うと引用だった、という感じ。引用を集めて、切り取るのはうまいんだけど、どこまでも立場を明かさないピントの合わなさがネット世代的とも感じられる。真ん中くらいのシーンでさりげなく入っていた「私たちはその言葉がない」ということはすごくリアリティがあると思った。

三浦 確かに、このシーンが一番ピントが合っている。

羊屋 そうだね。SNS でこんなに言ったら間違いなく炎上する。

やなぎ 言葉なかったら戯曲にもできないんだけど、「言葉がない」という切実さ。

三浦 ネット世代的、という事で言うところの作品も『NO と言って生きるなら』、『氷と冬の獣たち』、とあわせて「言葉をスライドさせていく気分」としては似ている、ともいえるか

もしれない。戯曲の形・構造で違いはあるけど。

やなぎ 東京の演劇のスタイルとしてこういうのは多いのかな？政治的・社会的なテーマというか。

鳴海 まあ、そうですね…。戦争が背景にあるという意味では『東京ノート』みたいとも言えるかもしれません。人間個人のドラマや、人間の関係性のドラマが多いと思うので、政治性・社会性はメジャーなテーマではないかもしれません。「わからない距離感／距離感がわからない」というのは若い世代の作品に多い印象はありますが。

やなぎ 書いていることは直球だと思う。言語的な美学とかはそれほどないかもしれないですが…こういう若い人を大切にしたいと思います。

『鱗を売る店』

羊屋 アリストパネスの『蛙』をモチーフに、という事なんだけど、『蛙』は批評大会のような作品で、それがこの作品からはあんまり感じられなくて、どこにしのばされているのか？ということが気になった。出だしや、短いセリフの対話のテンポが小気味よいと思いました。

白神 冒頭の感じとか、奇妙な雰囲気とかの世界観が好みではある。なんか変で気になって読んじゃう。ポップアングラ的でおもしろかったです。

羊屋 北海道は寺山ムーブメントがあるよね。

三浦 ポップアングラね。歌でつなぐやり方とか、新しい手法ではないんだけど悪い感じはしないよね。

鳴海 アングラに特徴的な、よくしゃべる感じが懐かしい…と思いました。

『犀言語』

三浦 一次審査の時からなんか気になる作品なんですよ。

羊屋 レディオヘッドとニルヴァーナ、SNS の画面やスーパーマーケットの BGM として使用しているのにやられました。

やなぎ これは推したいですね。どうも気になる作品です。

鳴海・白神 同感です。

『仮想クラブ』

三浦 設定、状況がおもしろい。こういう状況が作れたら、しゃべるだろうな、という作者のイメージに必然性を感じた。台詞も読ませるしおもしろかった。ちくりとダークな皮肉もあって総じて良い印象を持ちました。

やなぎ 遠いものと、すごく近いものの混在がうまくいってるなと思いました。ラストがうまくいくかはよく分からないんだけど、それも含めてすごく練られていると思います。

羊屋 本としての戯曲の書き方が美しい、「大木」は舞台美術としてどうとでも見れるよう

に作れるなど。

鳴海 意欲的な作品だと思いましたが、難点を言うと、多くのモチーフが詰め込まれていて、それが個別場当たりのようになってしまって、相関関係を生みながら塊になっているという構造ではなく、意図的に個別になっている印象もない。それぞれのモチーフが、個別に現れてくるだけに留まっているように読める点です。

羊屋 仮想だからね…。

鳴海 筋を練る力量はすごいと思います。ただ、社会問題の描き方という点では浅さは否めない。

白神 すごく多様な人々、世界から弾かれた人たちを書いているのは分かるけど押し付けられるような感触があって、それが怖いと思った。

鳴海 すごくはっきり言ってくる感じはある。

白神 だからと言ってすごく明るくはないから、おもしろい不快感というよりは、引っかかるなと思いながら読んだ。

三浦 「なりたいたいものにはなれない」という点を逆説的に問うているというのは上手いと思いました。多様な人たちをデパートのように出して虚しさ・空洞化をコント的にまとめた感じ。『山田くんは就活中。』とどっちを評価するかだと、『山田くんは就活中。』のほうが明るいなとは思った。

鳴海 このテーマであれもっと深く書いて欲しいと感じます。

司会 まずは14作品全作品についてお話していただきました。いくつかの論点が上がってきていますが、特に気になった点や作品についていかがでしょうか。

鳴海 『氷と冬の獣たち』と『NO と言って生きるなら』は同じ集団創作ですが、『氷と冬の獣たち』は概要と本文に書かれていることの齟齬はない。ただ、「冷たい関係」という違和・寂しさを感じていながら、どこことなく自分事ではなく、自分を枠外に置いている感があり、自分の血を流していると感じられない。そこまで含めての「冷たさ」とも言えなくもないんですが…。

白神 『NO と言って生きるなら』の方が言葉のおもしろみはある。『氷と冬の獣たち』は聞いているうちに分かってくる情景、いろんな事情、周辺の景色が見えてくる感じ。

鳴海 そうですね。『氷と冬の獣たち』の言葉はアイデンティティを持って立っているという訳ではありませんが、言葉の周辺がフレームインしてきて、最後にパノラマっぽくなるという感じが独特で好きです。

三浦 『World Word Web』と『氷と冬の獣たち』、『NO と言って生きるなら』はコンセプトをどう評価するか、ですね。『World Word Web』はSNS、Twitterのようなフレームがある。『氷と冬の獣たち』、『NO と言って生きるなら』はそれ（フレーム）がないのをどう評価するか。興味深い点は沢山あるんだけど、フレームがない、つまり設定がない、というこ

とは覚悟がいる。「何が問題でこれをやっているのか」の理由が「集団だから」ならばコント台本の方がおもしろい、となってしまう。

羊屋 『NO と言って生きるなら』と、『World Word Web』・『氷と冬の獣たち』は違う。『NO と言って生きるなら』の身体言語を培ってきたベースはチェルフィッチュからの流れでしょう。

鳴海 その意味でいえば、『氷と冬の獣たち』も、十分に身体言語だと思います。種類は違いますけど、『World Word Web』はネットという基本設定に重きがありますね。

羊屋 「戯曲」を「書かれたもの」と考えたときに、『NO と言って生きるなら』は1P ごとのまとまりがある。ページをどこでめくるのか、ということが考えられていて「戯曲を読んでいる人」の為の、仕掛けがあるように感じられる。

鳴海 文体について考えるとどうでしょう？語の繋がりを工夫して連想をずらしていく文体という意味では『NO と言って生きるなら』『リンチ（戯曲）』『氷と冬の獣たち』が同じ効果を持つともいえる。

やなぎ 好みで言うと、私は『リンチ（戯曲）』ですね。

羊屋 私はそこは同じ引き出しに入れてなくて、むしろ集団創作という点で『氷と冬の獣たち』と『It's not a bad thing that people around the world fall into a crevasse.』が近いと思った。書いた人がそのまま登場人物になっているとめるわけだけど、それぞれボリュームがばらばら、サーモグラフィーのバラバラ感が共通項。

鳴海 それは『NO と言って生きるなら』も一緒では？

羊屋 『NO と言って生きるなら』も確かに‘冷たさ’‘温かさ’について書いてあるとは思う。でもレイアウト、1 ページにひとりずつ収めていく点が違う。

鳴海 『氷と冬の獣たち』は「冷たさ」について書いてはいますが、冷たさ・温かさの判断基準は主観というよりは相対的です。個人というより関わりを描いていて、その間に起きるイベントに終始している。そのあたりの不確定性、わからなさ、わからなさがデフォルトの感触はこの世代には共感できる部分なのかもしれない。その意味で言うと、『NO と言って生きるなら』は世代が近いから共感できる感触があります。それでも、それで良いのかという部分はつきまとってしまいますね。『氷と冬の獣たち』も『It's not a bad thing that people around the world fall into a crevasse.』もコロナ禍を扱った作品であるのは間違いないです。ドキュメント要素があるのは『It's not a bad thing that people around the world fall into a crevasse.』、『氷と冬の獣たち』はわかりにくいけどコロナ禍における距離感、関係性が技術的に出ています。私は『氷と冬の獣たち』の、モノローグとダイアローグの連続という構造に、わざと抽象的・硬質な言葉を入れ子にして、プライベートなはずなのにプライベートからずれていく瞬間を作っている手さばきに可能性を感じます。ただ、さっきも言いましたが、書いている彼ら自身がその「冷たさ」に踏み込んでいる態度を感じ取れなかったのが惜しい。

三浦 『氷と冬の獣たち』は短さがネックかなと。上演するとしたら1時間以内くらいだよ

ね。これだけ作者がいるならもっと、2時間くらいできるのではと思ってしまう。集団創作、俳優でつくることに興味はあるんだけど。一人の作家性にこだわらなくても作品創作ができるかどうか、という話でもある。それでどちらかと言ったら『It's not a bad thing that people around the world fall into a crevasse.』を推したい。

羊屋 『It's not a bad thing that people around the world fall into a crevasse.』は躁状態がすごくいいなとは思っている。まさに「今」だったな、という感じ。一人の作家性ではあるけど、合意は取ってきて、青い鳥の集団創作とかとは全く違うような集団創作の話になると思う。逆に『氷と冬の獣たち』は鬱状態の感じもする。

三浦 集団創作の話にやなぎさんは興味を持てますか？

やなぎ 集団創作にはある種の弱さもあります。良質なドキュメンタリー以上にならないというか…。SNS 的開示性があって最近の手法ともいえます。

三浦 劇団内での集団創作は昔からある手法ではある。時期によって流行、増減があるよね。

やなぎ 小説、詩の世界ではあまりやらないし、あったとしても評価されにくいから、演劇的な手法で挑戦するとも言えます。即興性はあるのかな？

三浦 作った時点ではあったんだろうね。

鳴海 『It's not a bad thing that people around the world fall into a crevasse.』はどうしてもコロナ禍の事実と形式の話に収斂しそうですね…

やなぎ 世相を映したものではありませんけどね…。

羊屋 記録として、色々な断片を後で思い返すとおもしろいかもしれない。

やなぎ そういう意味では良質で良心的なんですよ。ちゃんと聞き取って書いて、という誠実さを感じる。相応する量もある。

羊屋 同世代の作家さんのスペシャルサンクスの量に、助け合いを感じる。一つの作り方としてすごい。この時にこの企画が必要だったのだろうと感じる。練れてないかもしれないけど、オンライン演劇の戯曲がたくさん届いた中で本腰が入っている感じがあった。創作時の垂直と水平の話は必ず出てくるから、今これを話す意味はあると思う。作家としてはモスクワカヌさんが作者としてクレジットされていますが、劇作家女子会という劇作家たちのコレクティブ作品ともいえます。劇作家が集団創作している『It's not a bad thing that people around the world fall into a crevasse.』、役者たちの集団創作である『氷と冬の獣たち』の違いがおもしろいなと思う。どちらかといえば会話を取りたいなあ。

鳴海 長さの話は毎年出ますね。『犀言語』は短いけどどうでしょう？

羊屋 『山田くんは就活中。』も長くはない。でもどちらも圧縮感がある。長さじゃない時期に入ってきたってことかな？

鳴海 『山田くんは就活中。』と『仮想クラブ』もモチーフは違うけど似ている。『山田くんは就活中。』には吹き溜まり感はないですね。

三浦 『丁寧な暮らし』はユニークではあるよね。

羊屋 例えば、人種問題のことになるけど、スパイク・リーの映画「Do The Right Thing」

にはキング牧師やマルコム X に影響されている若者が戯画的に描かれ、明るく哀しい。『山田くんは就活中。』の戯画的な人物像の描き方にも、同じような喜哀を感じる。

やなぎ そう、絶望を戯画的に見せる感じね。『明けない夜があったとして』は音楽が聞こえてこない。でもその真面目さが良いなとも思います。『山田くんは就活中。』と『明けない夜があったとして』は若い世代への希望を感じているところがあるのかもしれない。

以上のような議論を経て、下記 5 作品が二次審査を通過しました。

It's not a bad thing that people around the world fall into a crevasse. (モスクワカヌ)

犀言語 (高谷誉)

丁寧なくらし (私道かび)

山田くんは就活中。(ダドイダイ)

リンチ (戯曲) (羽鳥ヨダ嘉郎)

2021 年 1 月 10 日公開最終審査会にて、上記 5 作品の中から大賞・特別賞受賞作を決定します。

公開最終審査会 1 月 10 日 (日) 14 時～
愛知芸術文化センター アートスペース A にて (ライブ配信あり)
5 作品はウェブサイト、審査会会場等でご覧いただけます。

